顕現日　マタイ2章1―12節

［直訳］

1 さてイエスは　生まれて　ユダヤのベツレヘムで　ヘロデ王の日々に、
見よ、博士たちが　東から　到着した　エルサレムに
2 言いながら、
「どこに　いる　生まれた王は　ユダヤ人たちの。
なぜなら私たちは見た　彼の星を　東で
そして　私たちは来た　彼を礼拝するために。」
3 だが聞いて　ヘロデ王は　動揺した
そして　全エルサレムは　彼と共に、
4 そして　集めて　すべての祭司長を　そして　民の律法学者たちを
彼は尋ねていた　彼らに
「どこに　メシアは　生まれるのか」。
5 それで　彼らは言った　彼に、
「ユダヤのベツレヘムに。
なぜならこのように　書かれている　預言者を通して。
6 『そして　あなたは　ユダの地ベツレヘムよ、
あなたは最も小さくない　ユダの指導者たちの中で。
なぜならあなたから　出るであろう　指導者が、
ところの　導くであろう　私の民イスラエルを』。
7 そのとき　ヘロデは　密かに　呼んで　博士たちを、
注意深く尋ねた　彼らに　星の現われていた時期を、
8 そして　彼らを遣わして　ベツレヘムへ
彼は言った、
「行って、あなたがたは調べよ　注意深く　子どもについて。
それであなたがたが発見したときには、
あなたがたは報告せよ　私に、　私も　行って　彼を礼拝するために。」
9 それで彼らは聞いて　王に　出かけた
そして　見よ、星が、ところの　彼らが見た　東で、
先を進んで行った　彼らの、
行って止まるまで　子どもがいた場所の上で。
10 それで見て　星を
彼らは喜んだ　非常に大きな喜びを。
11 そして　行って　家に、
彼らは見た　子どもを　彼の母マリアと共に、
そして　ひれ伏して
彼らは礼拝した　彼を

そして　開けて　彼らの宝を
彼らは献げた　彼に　贈物を、黄金と乳香と没薬を。
12 そして　夢で告げられて　ヘロデのもとに戻らないように、
他の道を通って　彼らは去った　彼らの地方へ。

［新共同訳］
1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。
6『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」
7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8 そして「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

①構成

ⓐ 1―12 節は三つの段落に分けられ、それぞれの段落には「星」と「礼拝する」とが使われ、キーワードとなっている。

1―2 節　博士たちは東方から来た
　　彼の星を見て、礼拝するために
3―8 節　ヘロデ王は動揺し、尋ねた
　　星について、礼拝するために
9―12 節　博士たちは星を見て
　　大喜びで、礼拝した

ⓑ 1―2 節
イエスが生まれたとき、ユダヤ人の王の誕生を示す「星」を見た博士たちは、「彼を礼拝する」ために東方からエルサレムにやって来る。

Ⓒ 3―8 節
それを聞いて動揺したヘロデは、宗教上の指導者を集めて、メシアはどこで誕生するのかと尋ね、

博士たちを密かに呼んで、「星」の現れた時期を聞き、幼子について注意深く調べて報告するようにと指示する。それは「彼を礼拝する」ためだとヘロデ王は言うが、それは虚偽であり、幼子を殺すためであったことは、2 章 13 節以下で明らかになる。

ⓓ 9 ― 12 節

博士たちが出かけると、東で見た「星」が彼らを導き、幼子が母マリアと共にいる場所に案内した。大喜びで「彼を礼拝し」、贈り物を献げ、他の道を故国へと去って行った。

②博士たちの態度（1 ― 2 節）

ⓐヨセフに現れた天使は、マリアから生まれる子について「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」（一 21）と告げていた。そのイエスがヘロデ王の治世に誕生したとき、東方の博士たちは「ユダヤ人の王」の誕生を示す「星」を見た。罪から人を救う幼子の誕生は、星によって、異邦人に知らされる。この幼子による罪からの解放はユダヤ人だけでなく、異邦人にも及ぶからである。

ⓑ博士たちは星を見ると、「彼を礼拝する」ためにエルサレムに来た。「ユダヤ人の王」という称号は、十字架上の罪状書きに書かれた称号であるから（27 章参照）、罪の贖いをほのめかす称号である。もちろん、博士たちはそれを充分に意識してはいないだろう。だが、闇に星の光を見た彼らは、「ユダヤ人の王」に引き寄せられるように、エルサレムへと向かったのである。

③ヘロデ王の態度（3 ― 8 節）

ⓐだが、「ユダヤ人の王」の誕生は、ヘロデ王には「動揺」を引き起こす要因でしかなかった。彼は、聖書に詳しい宗教指導者を呼んで、メシアがどこに生まれるのか、その場所を「尋ね」（3 ― 6 節）、星の動きに詳しい博士たちを呼んで、星がいつ現れたのか、その時期を「注意深く尋ねた」。

ⓑこうして彼は、聖書の専門家と占星術の専門家とからメシアが誕生する場所と時期とを聞き出すが、その目的はメシアを礼拝するためではない。彼は博士たちをベツレヘムに送り出すとき、「わたしも行って、彼を礼拝する」と述べてはいるが、13 節以下に描かれるように、その真意は幼子を抹殺することにある。彼は自分の地位が脅かされるのではないかと不安に駆られている。そのような彼の目には、幼子の到来が持つ意味が見えない。このようなヘロデ王が、星を見て行動を起こした博士たちと対比される。

④再び、博士たちの態度（9 ― 12 節）

ⓐ博士たちはベツレヘムへの途中、故国で見た星を再び見て、「非常に大きな喜びを喜んだ」。これは道案内に出会えた喜びだけではない。むしろ、この「星」は、民数記 24 章 17 節「ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり…」と言われていた星であり、メシアを表す星である。その星の下では、幼子が母マリアに抱かれている。この幼子こそ闇に輝く光である。博士たちはそれを見るから、喜んだのである。

ⓑ 11 節では、同じ構造の文章（分詞形の後に、主動詞）を三度くり返して、この喜びが高まる様子を巧みに表現している。

㋐家に「行って」、幼子を「見た」。待ち望んでいた救いを彼らは目の当たりにする。

㋑「ひれ伏して」、幼子を「礼拝した」。真に礼拝できる唯一のものに彼らは出会った。
㋒宝を「開けて」、黄金、乳香、没薬を「献げた」。闇に輝く光を見た彼らは高価な贈り物でその喜びを表す（イザ六〇 6）。

幼子を見て、礼拝した彼らは、かけがえのない高価なものを献げることによって、この世の富を求めるこれまでの生き方に決別し、幼子が示す新たな方向に歩み始める。人を生かす王に出会った彼らは、人を殺す王のもとにはもはや戻らず、「別の道を通って」故国へ帰って行った。

Ⓒ礼拝する（プロスキュネオー）
㋐ある人物に敬意や尊敬を払うため、その前にひれ伏して足・衣のすそ・地面などに接吻することは広く見られる習慣である。プロスキュネオーはそれを表して「崇拝する・礼拝する・誰かの前でひれ伏す」を意味する。マタイ福音書はこの語を好んで用い、しかも 3 回の用例を除けば（四 9・10、一八 26）、礼拝の対象はすべてイエスである。
㋑博士たちもヘロデも、誕生したメシアを礼拝したいと語るが、メシアであるイエスに実際に取った態度は対照的である。博士たちにはメシアを見つけた大きな喜びがあり、この喜びのゆえに遠路をはるばる来て、イエスにひれ伏し、贈り物を献げる。だが、ヘロデには博士たちのような喜びはない。むしろ、メシアの誕生を聞いたヘロデが抱く感情は不安である。
㋒ヘロデの場合、メシアであるイエスは真に礼拝すべき相手ではなく、殺さねばならない邪魔者である。イエスが王にとって邪魔なのは、誕生したメシアが「ユダヤ人の王」と博士たちから呼ばれたからだろう（2 節）。このメシアの称号を文字通り受け取るなら、メシアとして生まれたイエスは自分に代わる新しい支配者ということになり、ヘロデの王位を脅かす者ということになる。
㋓しかし、マタイ福音書で「ユダヤ人の王」という称号は、ほかには受難物語で、特に十字架につけられたイエスに使われる（二七 11・29・37）。つまり、マタイにとって、「ユダヤ人の王」として生まれたイエスとは十字架に向けて歩むイエスである。イエスがメシアなのは、ヘロデが考えるような政治的な支配者として君臨するからではなく、十字架につけられるからであり、それによってイスラエルの民を罪から救うからである（一 21）。
㋔博士たちとヘロデの態度の違いを描くことによって、メシアとして生まれたイエスがどのような意味でメシアなのかを読者に問いかけている。マタイにとって、人が本当にひれ伏すべきメシアとは、十字架につけられたイエスであり、復活して「世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（二八 20）と弟子たちに約束したイエスである。キリスト者とは、このイエスにひれ伏す者のことである。その意味で、博士たちは幼子イエスに喜んでひれ伏し、イエスへの信仰を呼びかけることによって、キリスト者の先駆けとなったのである。

⑤天からのしるしに従う自由さ

ⓐ幼子をはさんで、まったく異なる二つの人物が対比されている。一方には、メシアがどこに生まれるかを知っていても、腰を上げようとはしないヘロデ王がいる。この人は世の権力の魅力に縛られ、自由を失った人である。この人の対極には、闇に輝く星を見て、幼子を礼拝するために、遠い道をやって来る博士たちがいる。彼らは天からのしるしに心を開いている。
ⓑヘロデ王のようにこの世にすがれば、メシアから離れる。メシアを迎えるためには、天を見て、そのしるしに従う自由さが不可欠なのである。